

3) 地形図

地図の概要

広域スケールでの気温分布や気流分布の形成には、海陸分布や海拔高度や地形等が大きく影響している。また、河川等の開水面の存在は都市内の微気象にも影響を及ぼすことが知られている。地形図はこれらの気象現象の要因の分析を示す基礎的な図である。

地図作成の対象及び目的

地形図の作成目的は大きく二つに分けられる。一つは主に第1階層の地図の目的となるもので、当該都市(地域)を含む広域の地形、海陸分布、海拔高度などの気温や気流への影響要因の把握である。もう一つは主に第2階層の地図の作成目的となるものであり、当該都市内の気流分布に影響を及ぼす谷筋や河川等の位置を把握することである。

標高図 : 対象地域内の地表面の起伏状況を示す。気温に影響を及ぼす海拔高度や、気流に影響する山や谷等の位置や規模、逆転層が生じやすい盆地の有無などの確認に用いる。

水面分布図 : 対象地域内における河川や湖沼、水路等の開水面の分布状況を示す。水面には周辺空間の冷却効果があり、また河川は風の通り道としても機能することが多く、水面分布図によってヒートアイランド現象を緩和する地域資源の把握が可能である。

作成手順及び使用するデータ

標高図については、国土地理院から50mメッシュと250mメッシュの数値地図が発行されている。水面分布図については、土地利用図や植生分布図から必要なデータを抽出して作成することも可能である。

参考文献：数値地図ユーザズガイド(第2版補訂版)、(財)日本地図センター、1998年

地図の表現方法

標高図については、同じ標高の地点を結んでできる等高線や、標高に応じて色分けされた標高分布図として表現されるのが一般的である。

水面分布図については、国土地理院が発行する数値地図を用いるとデータ加工が容易である。河川や湖沼等の水面の種類に応じて色分けされた図が用いられる。

地図作成上の留意事項

標高図については建物高さ分布図と組み合わせて地表面起伏分布図を作成することも可能である。

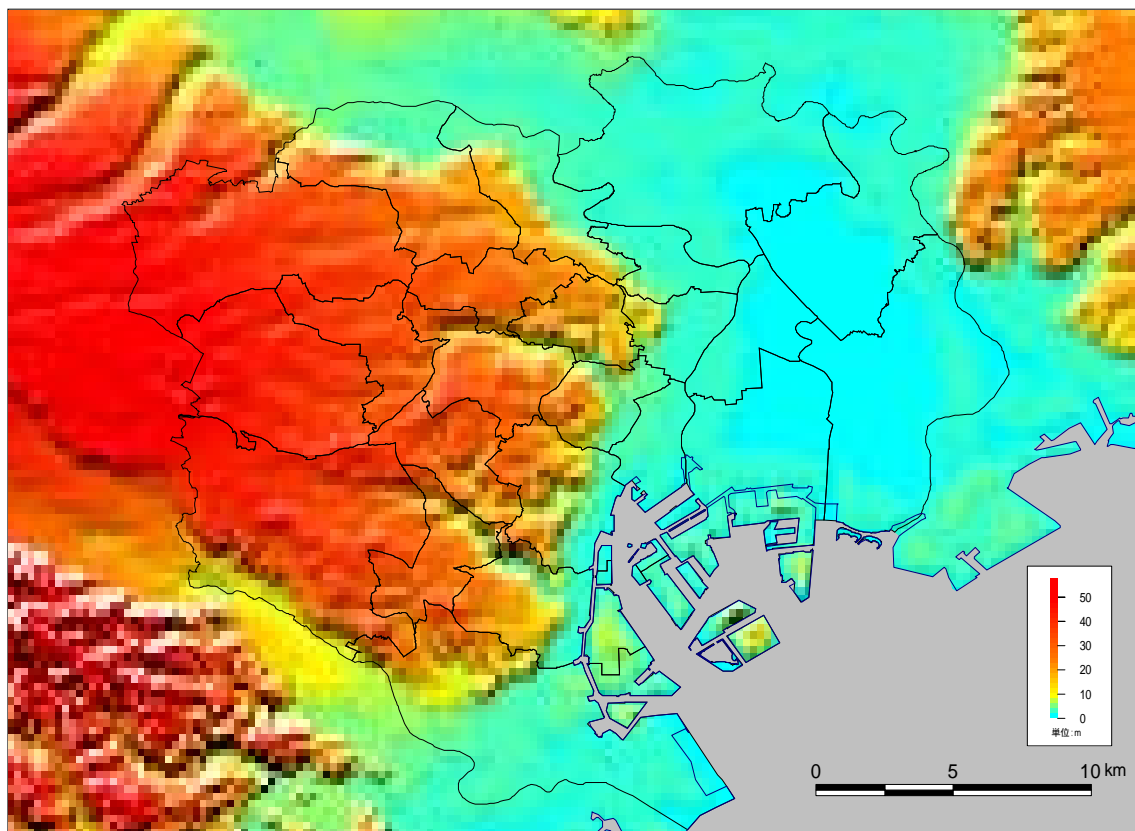


図 17 地形図(標高図)

1. 図の基本情報	
1) 図のタイトル、目的	標高図 (目的: 地形の把握)
2) 図のスケール	約 40km × 約 30km
3) 図の作成年月	2003 年 3 月
2. 図の作成手順	
1) 図の使用データ	数値地図 50m メッシュ (標高)
2) 図の作成手順	50m メッシュから標高分布図を作成した。
3) 図の解像度	メッシュの大きさ: 50m × 50m
4) 作成上の留意点	-
3. 図の解説等	
1) 図の見方	色階により標高分布を示している。
2) 図の解説	23 区の臨海部から東部にかけては低地が広がっており、西側には台地が広がっている。